徳島県上勝町における
地域活性化の取り組みについて

愛媛大学法文学部総合政策学科地域コース 2008年度入学
今井　裕章・植野　志保
北島　芳美・宮崎　将史
森貞　　彩

1　上勝町の人口と産業の移り変わり

(1)　はじめに

先進国と言われている日本もやはりその国独自の問題に悩まされている。日本では中央集権的な政治が行われており，中央と地方との格差はどうしても生じてきてしまう。その格差も顕著になっており，地方は疲弊している。そのような状況に置かれながら，町をなんとか活性化していこうと頑張っている地域が多数存在している。成功や失敗もあるが，今回はその中でも，徳島県の上勝町にスポットを当ててみる。この上勝町は，何の変哲もない「葉っぱ」を売るというビジネスで町全体が活気付いている。年収1,000万円を超える住民もおり，葉っぱビジネスの価値の大きさを表しているだろう。またこのビジネスの中心となっているのが高齢者かつ女性というのだから驚きだ。ここに行き着くまでには様々な苦労があった。過去の上勝町を振り返りながら，現在の上勝町を見ていくことにする。

(2)　上勝町の概要

上勝町は徳島県の中央部に位置し，人口は約2,000人，85％まで森林で，残る15％もほとんど急傾斜地で住宅は標高100メートルから700メートルほどの間に，大小55の集落に分かれて点在している。上勝町の１つの大きな特徴は約20ヘクタールの美しいブナの原生林が残っていて，本数は少ないが，太さ，長さは日本有数であると言われている。

次に人口の変化を追っていく。

上勝町は2005年の国勢調査で2,000人を切り，1,955人にまで減少してしまった。「四国でいちばん人口の少ない町」になった。1,955人という人数から，もはや「町」ではなく「村」にさえ思える。しかし，最も人口が多かった1950年には，6,356人もの人々がこの町で暮らしていた。その後，基幹産業である農林業の衰退と共に人口は減り続け，半世紀の間に３分の１以下にまで減少した。しかも，町民の約半数は65歳以上の高齢者で構成されている。日本の少子化がこのまま進行すると，上勝町の人口は2030年には922人にまで減少する一方，高齢化率は57％にまで跳ね上がると予測されている。

上勝町は国内だけでなく，世界で進行する少子高齢化の先頭集団を走っている。農林業の衰退と

表１　上勝町の人口構成（2005年）

人　口	
総人口	1,955人
男性人口	922人
女性人口	1,033人
年少人口	165人
生産年齢人口	841人
老齢人口	949人

ともに人口が減少してしまった以上，新たな産業を用いての持続可能な地域活性をおこなっていく必要があるのは言うまでもない。その産業を担っているのが，葉っぱを用いての現在の「彩」事業である。ここに行きつくまでの産業の移り変わりをみていく。

(3) 上勝町の産業の移り変わり

先述したように，上勝町の総面積の85％は森林が占めている。この森林が上勝町にとってのもっとも重要な資源であり，林業は町の基幹産業だった。上勝町の高温多雨の気候は杉の生育に適しているため，国策に応じて町を挙げて山の頂上にまで杉を植えていた。しかし，1961年から木材の輸入自由化が段階的に始まり，海外から木材が大量に輸入され，植林した木が育たないうちに木材価格が暴落した。そのため，林業は壊滅的なまでに衰退し，間伐などの手入れが出来なくなり，森林の荒廃が進んでいる。

上勝町での農業は，山の斜面を切り開いた棚田で行われた。その一つ，「樫原の棚田」は「日本の棚田百選」に選ばれている。また，樫原だけでなく，町内全域の山という山の斜面に，見渡す限りの棚田が等高線を描くように連なっている。上勝町の棚田では，春から秋にかけては米，秋から翌春にかけては小麦や大麦のほかに大麦の一種である裸麦や，あるいは菜種を栽培する二毛作が行われていた。家の近くの畑では自家用の野菜に加え，柿やびわなどの果物のほか酢橘，ゆず，上勝町特産の柚香などの香酸柑橘類を植えていた。山に自生し，あるいは棚田や畑の畦などで栽培するお茶の葉からは，特産の阿波晩茶を作る。阿波晩茶は，葉肉が厚くなる７月を待って摘み取った茶葉を大きな釜で茹でて摺った後，桶に一週間以上漬け込んで乳酸発酵させ，天日で乾燥させた発酵茶である。お茶づくりの最盛期を迎える真夏になると，家々の庭先から茶葉を蒸す香り，お茶を摺る香り，天日干しする香りが立ち上る。その香りと風景は「日本のかおり風景百選」に選ばれている。

第二次世界大戦後に農業の形態が大きく変わった。敗戦し，食糧難に苦しんでいた日本に，アメリカの余剰農産物がなだれ込んできた。

1952年にはパン食を奨励する「栄養改善法」が，アメリカで「余剰農産物処理法」が制定された54年には，主食をパンと定めた「学校給食法」が制定された。田んぼの真ん中に建つ小学校でさえ，子どもたちに米を食べさせることができず，アメリカ産小麦でつくったパンを主食にしなければならなかった。主食のパンに合わせておかずも洋食化され，アメリカ産とうもろこしを飼料にした畜産物や，大豆から搾る油を使った料理が奨励された。見渡す限り棚田が広がっていた上勝町の小学校でも，パン食の給食が開始された。

当時の厚生省は和食を時代遅れで劣った食文化とみなし，食の欧米化を図る「栄養改善運動」を展開した。これを受けて，各市町村では食生活改善推進委員が任命され，油の消費拡大を図るフライパン運動などが展開された。御用学者たちは米を食っていたから戦争に負けた，米を食ったらばかになるという「米食低脳論」を唱え，マスコミもこれに盲従した。こうして和食は洋食に劣るという幻想がつくられていった。食の欧米化が進んだのはあたかも日本人の嗜好が変化し，食生活が豊かになったからであるように思わされているが，実は国が御用学者やマスコミを動員して行った洗脳の結果である。

食生活の欧米化によって食料輸入が増大するにつれ，米の消費量は減少していった。1962年には年間約２俵にあたる118キロだった一人あたりの米の消費量はほぼ半減し，一俵を切るまでに激減した。

「いっきゅうと彩の里」に変わるまで，上勝町のキャッチフレーズは「温泉とみかんの里」だった。上勝町のある勝浦郡におけるみかん栽培の歴史は古く，隣接する勝浦町では江戸時代に始まったと伝えられている。その苗が町内の正木地区に移植されたのは明治時代のことだった。正木地区で始まったみかん栽培が旧高鉾村全域に広がったのは，1960年代のことだった。

果樹栽培を促進するために，1961年には「果樹農業振興特別措置法」が制定された。もはや米ではなく，収益率の高いみかんに切り替えようと，農業改良普及所や農協でもみかん栽培を奨励し，講習会などを開いて農家に勧めた。当初はみかんの価格が高く，みかんさえ作っていれば，お金に困ることはなかった。

しかし，「みかんブーム」も長くは続かなかった。果樹振興法を受けて西日本全域にみかん栽培が急速に拡大したため，みかんはまもなく生産過剰になり，価格が低下し始めた。早くも1969年には全国的な大豊作により価格が暴落した。決定的だったのは，1981年の異常寒波である。当時，上勝町のみかん園は120ヘクタールあったが，一晩でその約８割が枯死し，みかん栽培は壊滅的な打撃を受けた。被害総額は25億円と算出された。1987年の出荷を最後に，明治時代から続いたみかん栽培の歴史は幕を閉じた。

かといって，現在の上勝町でみかん栽培が全く行われていないわけではない。データによると上勝町の農業産出額（2006）は，10億７千万円である。そのうち，果実産出額は２億１千万円である。梅の果樹栽培面積が３ヘクタールで，続いて柿が２ヘクタール，栗が１ヘクタールである。収穫量は梅と柿が11トンで栗は１トンである。みかんとはっさくの果樹栽培面積は１ヘクタールにも満たないが，収穫量は３トンである。政府統計の徳島県全体のデータを挙げると，徳島県全体のみかん農家の農業粗収益は443万６千円で，農業所得平均は99万６千円である。上勝町独自のデータというのはないが，みかん農家は確実に存在し，過去に比べると衰退はしているが，多少なりとも上勝町の農業収益に貢献していることがわかる。

みかん産業の衰退の後，町を存続させるために，新たな雇用の場を設け，町外からの人も受け入れられるようにと，町が主体となって第三セクターを設立した。町で初めての第三セクターは1991年に設立した「株式会社上勝バイオ」である。この会社は，「菌床」と呼ぶほだ木としいたけを生産・販売している。菌床とは，広葉樹のおがこに米糠やふすまなどを加えた重さ１キロほどの培地に，しいたけ菌を接種したものである。1990年，上勝町ではカネボウ株式会社の菌床を導入し，５戸の農家が合計６棟のハウスを建設して，町内で初めての「菌床栽培」に乗り出した。

上勝バイオの設立を決断した当時，しいたけの価格はきのこ類の中でも最も高価であり，価格も安定していた。ただ，上勝バイオを設立したころから，中国産しいたけの輸入が始まった。生しいたけの輸入量は2000年に４万トンを超えたが，日本では禁止されている残留農薬が検出されたことをきっかけに輸入量はわずかに減少した。国産の３分の１以下の価格の中国産しいたけの輸入拡大によって，国産生しいたけの価格は暴落した。上勝バイオを設立した当時，１キロあたり1,700円ほどだった価格は，2005年には700円と半分以下にまで低落した。中国からの輸入が始まる前の1980年代に８万トンを超えていた国産生しいたけの生産量は６万トン台に減少した。町内の菌床しいたけ農家の経営は苦しくなり，高齢化とも相まって，栽培を断念した農家も存在した。希望を抱いて上勝町に移り住んだしいたけ農家のなかにも離農する家族が出た。

上勝バイオの新たな戦略として，干しシイタケの生産に取り組んでいる。この干しシイタケの販売に至るまでには，環境を考える上勝町ならではというのもあるだろう。この干しシイタケは形が整っていないために廃棄処分となっていた生シイタケを加工したもので，昨年度は437万円も売りあげた。形に問題があるだけで，味には全く問題がないため，販売し好評となり，今では上勝バイオの目玉商品の１つとして推される商品である。なんでもないものから，利益を生み出す，捨てられていたものから利益を生み出す上勝町は，あらゆる地域の手本となれるだろう。

(4) 最後に

地域活性化を行う際，手っ取り早いとされている手法が，有名企業の誘致や新たなハード事業の展開である。これらの手法は現在ではあまり好ま

しくない手法であると誰もが感じている。有名企業の誘致などより，第三セクターを設立しての上勝町の政策は今のところプラスに働いている。彩事業を含めると大きな利益につながっている。外から人を呼んで，町全体を活性化していこうという活性化方法も分かるが，まずはその土地に住んでいる住人が町を盛り上げていこうという気持ちの有無が，町の活性化に大きく影響してくると思う。やる気があれば，上勝町のように，第三セクターを設立してでもという考えに至る。第三セクターのおかげで町が活気を取り戻してきたとなれば，他から人を集めるのも良いし，そもそもその第三セクターに魅力があれば自然と他から人が集まってくるだろう。幸か不幸か，上勝町は自然災害で地元産業が衰退したが，そこでのマイナス要素がバネとなって現在の小さいながらも大きな利益を生み出せる町となった。このような事例もあるのだから，現在町の衰退が気になる地域も，上勝町のように這い上がってくるくらいの気持ちがあれば，いつか実を結ぶのではないだろうか。上勝町はそんなことを考えさせてくれる，魅力ある町の１つである。

〈参考資料〉

人口ウォッチャー　http://www.jinko-watch.com/shicho/1553.html

市町村の姿　http://www.machimura.maff.go.jp/machi/map2/36/302/economy.html

patmap都市情報　http://patmap. jp/CITY/36/36302/36302_KAMIKATSU_nogyo.html

政府統計の総合窓口　http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do

笠松和市・佐藤由美著『持続可能なまちは小さく，美しい』学芸出版社

笠松和市・中嶋信著『山村の未来に挑む』自治体研究社

四国の情報　http://planet777.jugem.jp/?day=20090603

（今井　裕章）

2　上勝町のごみ問題の取り組み

(1)　はじめに

世界の共通の問題である地球環境問題。京都議定書にも削減目標が掲げてあるように，世界全体でこの問題と向き合い，議論し，削減しようと取り組んでいる。地球環境問題は，唯一，世界全体が一緒になって考えている問題だろう。私たちにとっても切っても切れない問題であり，地道に取り組むこと，また，地球上に持続可能な地域社会を無数につくることでしか解決策はないと考える。そんな中，人口2,000人ほどの小さな町が80％の再資源化に成功した。小さな町だからこそできたことなのだろうか。地域が行ってきた地道な取り組みが80％の再資源化という結果に繋がった。このような取り組みを各自治体で行うことができれば，環境問題解決の糸口になるはずだ。本章では，80％の再資源化に成功するまでの奇跡をたどり，考えていこうと思う。

(2)　「ゼロ・ウェイスト」運動の概要

高度経済成長に伴った大量消費社会の到来で，都市部のみならず農村においても，多くのごみが発生するようになった。ゴミの量は増加の一途をたどり，その処理を担う自治体に財政負担の増加が重くのしかかるようになった。上勝町でも，かつて野焼きを続けていたが，県からの指導で野焼きを続けられなくなる一方，新しく焼却炉を買って，町内の広い地域のごみを回収する財政的な余裕はなかった。そこで，生ごみは堆肥化，それ以外のゴミは分別し，できるだけ多くのゴミを分別し，様々なリサイクル事業者に引き渡すことにした。

住民の理解と協力により進められたゴミ分別によるリサイクルの取り組みは「ゼロ・ウェイスト」の運動へと広がっていった。リサイクル事業者を探すうちに，分別の数は34種類にも上るようになった。そして，ゴミは町が回収して回るのではなく，住民によってゴミステーションに持ち込まれる仕組みを作った。次第にゴミ対策は町内だ

けでは限界があると感じ，「NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー」を設立し，ゼロ・ウェイスト運動を町外にも広げていった。

ゼロ・ウェイスト運動誕生までを簡単に述べてきたが，ここに至るまでには，多くの問題も発生した。住民の意識改革には特に頭を悩ませたことだろう。国の新しい制度の導入により，上勝町のゴミに対する意識も変化し，そのたびに新しい取り組みを考え，実践してきた。ここからは，80%再資源化成功に繋がったといえるゼロ・ウェイスト誕生までの上勝町の取り組みをみていこうと思う。

(3) 「ゼロ・ウェイスト」誕生までの軌跡

1995年，容器包装リサイクル法が制定され，1997年から段階的に施行されることになった。これを機に上勝町では，法律で定める以外にもリサイクルできるものはないかを調べた。分別ゴミのリサイクル事業者の取引を増やしていき，1998年には25業者，25分別となった。しかし，どうしてもリサイクル事業者が見つからない種類のゴミもあり，２基の小型の焼却炉を買うことになった。それと同時に，上勝町ではようやく野焼きをやめることができたのである。

2000年１月「ダイオキシン類対策特別措置法」が施行され，基準値を超えるダイオキシンを排出する焼却炉が利用できなくなった。上勝町が３年前に購入した２基の小型焼却炉のうち，１基はダイオキシン濃度の基準値を超えており，操作できなくなることが分かった。そこで当時の町長は，２基とも閉鎖することを決め，これまで以上にリサイクルを推進して焼却ごみを減らすことにした。新たにリサイクル業者を探し回り，それまでの25種類の分別に加えて，さらに10種類をリサイクルすることが可能になった。そこで，担当職員たちは，町内の各集落の会合に出向いて，ゴミの35種類分別への協力を求めて回った。そして，焼却炉停止と同時に，35種類の分別を始めることができたのである。住民たちは，きちんとリサイクルする為に，ビンや缶などをきれいに洗って，生ごみ以外のゴミステーションに持って行く。ゴミステーションは年末年始の３日間を除く，毎日，朝７時半から午後２時までの間に自由に持ち込めるようになっている。しかし，高齢者だけの世帯など車を持たない世帯は，ゴミステーションまでゴミを運ぶことができないという問題が発生した。そこで，ボランティアグループ「利再来かみかつ」が誕生し，地元の有志の方々が，高齢者世帯のゴミの運搬を行った。運搬できる人を募って，運搬できる人が自分のゴミを持って行くついでに運搬してほしい人に声をかけ，運搬するという形をとった。この運動は，後の「NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー」に引き継がれることになった。

こうして，上勝町ではゴミを35種類に分別した結果，年間140トンだった焼却ゴミが48トンにまで減量できるようになった（2002年には，プラスチック類２種類を１種類に分類するようになり，34分別となった）。一部のゴミについては，資源として業者に買い上げてもらうこともでき，財政

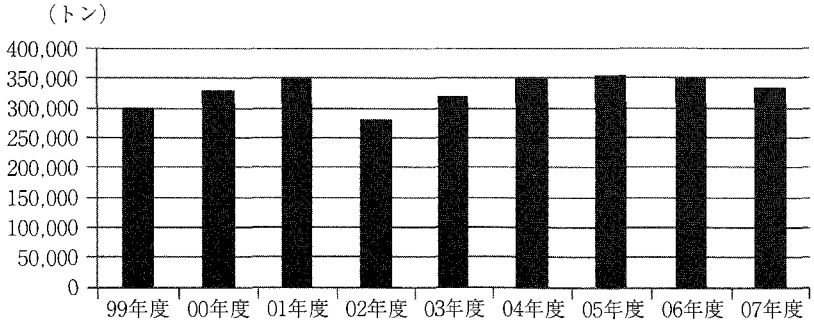


図１　上勝町のリサイクル処理量の変化

支出の削減にも繋げることができたのは，上勝町の大きな成果である。

(4) NPO法人「ゼロ・ウェイストアカデミー」の設立

すでに何回か出ている「ゼロ・ウェイストアカデミー」だが，これは，2003年の「ゼロ・ウェイスト宣言」に基づき設立された。

ゼロ・ウェイスト宣言とは次のようなものである。

「未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水，豊かな大地を継承するため，2020年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し，上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。」

上勝町は，ゴミそのものを根本からなくそうとしたが，町による町内だけの取り組みでは限界があり，町内全体はもとより，全世界に取り組みを広げていく必要があった。そこでゼロ・ウェイストの活動をさらに広げていくために「NPO法人（特定非営利活動法人）ゼロ・ウェイストアカデミー」が発足したのである。ゼロ・ウェイストアカデミーは，町より委託を受けて，「日比ヶ谷ゴミステーション」の管理をしており，上勝町介護予防活動センター「ひだまり」の事務を指定管理者として行っている。「ひだまり」には，ゼロ・ウェイストアカデミーの事務局と，リメイクを専門とする「くるくる工房」が入っている。

(5) 「ゼロ・ウェイスト」運動における問題・課題・提言

これまでゼロ・ウェイスト運動ができるまでを述べてきた。やはり，行政主導ではなく，消費者，生産者，行政が連携して行ってきたからこそ，80％の再資源化に成功できたのだろう。34種類もにゴミを分別することをいきなり強制された住民の中には，「めんどくさい」と言う人もいたそうだ。不法投棄のゴミもあったそうだが，2007年に町内で一斉清掃したところ，その後はあまり出なくなったという。住民による34種類もの分別とゴミステーションへの持ち込みは定着してい

上勝町におけるゴミ（資源）分別に関するポスター

る。しかし，ゼロになったわけではない。簡単に取りに行けないような傾斜地にゴミが投棄されていることもあるという。これからも集落ごとに会合を開き，住民に理解をしてもらい，変動していく社会に対して，住民が取り組みやすいよう皆で検討し，若者から高齢者までが住みやすいまちづくりを行っていかなければならない。そして，行政，消費者，生産者が連携して取り組むことで，ゼロ・ウェイスト宣言に掲げられている，2020年のごみゼロに近づいていくことだろう。

〈参考資料〉

徳島県上勝町　ごみっと・SUN46号：http://www2u.biglobe.ne.jp/~GOMIKAN/sun3/sun46a.htm
徳島県上勝町　ゼロウェイスト運動：http://www.soumu.go.jp/main_content/000063256.pdf#search

（植野　志保）

３　「彩（いろどり）」事業

(1)　はじめに

上勝町における「彩（いろどり）」とは，紅葉，柿，南天，椿の葉，梅・桜・桃の花など，料理のつまものに使う材料のことで，これを商品として販売している。この事業に上勝町では1986年から取り組みはじめた。今では上勝町の主要産業となっており，現在ではつまものの種類は約320種類にものぼり，年間売上高は２億6,000万円にも達する。これらの生産物は軽量であるが付加価値が高く，女性や高齢者でも容易に生産に携わることができる。この章では，上勝町の彩事業について事業内容，取り組みの経緯などを詳しく述べていく。

(2)　株式会社「いろどり」の事業内容

現在，社長を務めているのが彩事業を開発した横石知二さんである。株式会社「いろどり」では，現在の彩事業のコンサル的な役割，営業を行っている。従業員は社長の横石さんの他に７人おり，全員Ｉターンで移り住んできた。株式会社いろどりでは情報ネットワークシステムの運用を実質的に推進している。株式会社いろどりは，個性ある上勝町の農産物を安定した価格で取り引きしてもらえるよう企画，情報発信を行い売り込みを図ると共に，市場での評価や価格を有利に取引するために必要な様々な情報を，生産農家向けにわかりやすく加工提供する業務を行っている。具体的には，市場に対し，時期的にこれから必要になってくる商材の情報提供や活用の提案を行ったり，生産者向けに日々のデータ提供やデータ活用の講習会などを開催している。

(3)　「彩」事業の経緯

彩事業を上勝町に取り入れたのが横石知二さんである。横石さんは1979年に二十歳で上勝にきた。その頃の上勝町は男は朝っぱらから大酒をあおり，女は陰で他人をそしり合う日々を過ごすどん底の町だった。上勝町は1981年，異常寒波で町の主要産業であるミカンが全滅した。そこで横石知二さんは迅速な現金収入を一番に考えて，大急ぎで農業振興計画づくりに取り組む。異常寒波でミカンが全滅した後，短期決戦ですぐ現金収入になる季節ものの野菜栽培を進めて成功した。市場を求めて全国をまわることでまちの人から信頼を得られるようになった。

1986年，大阪の庶民的なお店である「がんこ寿司」で，出てきた料理についている赤いもみじをみて大喜びして持ち帰ろうとしている女の子に出会う。こんな葉っぱ上勝の山にいくらでもあるのに…そう思った次の瞬間，葉っぱを売ることがひらめいた。これが後の彩事業の発端である。

初めて横石さんが彩事業を上勝町で提案した当初，協力してくれた生産農家は４軒だけだった。翌年の1987年，販売を開始したが全く売れなかった。横石さんはどうすれば売れるのかを探るため自費で一流料亭に通い詰めて勉強した。そしてつまものには万葉集によるいわれによる物語のような流れがあること，季節感，自然のままではだめなこと，大きさをそろえることなどを学ぶ。その重要なポイントはすぐに農家に伝えて回った。こ

うして１パック５円，10円だった「彩」が100円，200円と上がっていった。

「彩」として出荷される葉っぱに値段がつき始めると，噂が広まり，参加する農家が増え始め，１年半後の1988年４月には生産農家は44軒に増え，「彩部会」が結成された。そして８月には134軒にまで増えた。それに伴い横石さんは販売先を増やすため「彩」商品のパンフレットを手に全国に営業に回った。行った先では，夜は温泉街や飲食店街をまわり，朝は市場へ行った。普通のやり方とは違い，売れるところを確保してから市場へ行き，「これぐらい注文が来ます」と伝えて対応を頼んだ。そして実際に注文が来るから市場の担当者にも喜ばれ，取り扱いがスムーズに始まるようになった。

1988年ごろからは，「彩」事業の売り上げは毎年100万円ずつくらい増えていった。（図２参照）1989年には，農家のおばあちゃんたちにも料亭に視察に行ってもらった。一流の料理人からつまものの説明を聴いたり，実際に料理をみることで，つまものが高級料理に使われていることを理解してもらえたのである。さらに，農家を集めて講習会や勉強会も開き，どんな商品が求められているのかを知ってもらった。1991年には5,700万円の売り上げを得た。

(4) 情報伝達システムの開発

町は一体となって情報化に取り組み，「彩」事業の産地情報・生産技術，販売情報の共有化を図る生産情報ネットワークシステムの構築を図った。

「彩」事業への取り組みは1986年頃からだが，当初は紙や電話，FAXの受発注が中心だった。上勝町のつまものの出荷は，JAを通じて主に京阪神や首都圏の市場に出荷されるが，市場が望む少量多品種の品物をタイミング良く供給できる体制がとれるかどうかが，産地として生き残れるかどうかの鍵になっている。上勝町では，他の町よりも早く市場に出荷予約を入れると共に，急な発注にも対応できるようにと，1992年から町の防災無線を活用した情報化に取り組んできた。

具体的には，防災無線の同報FAX機能により，市場から来た注文を一斉に送付するようにした。

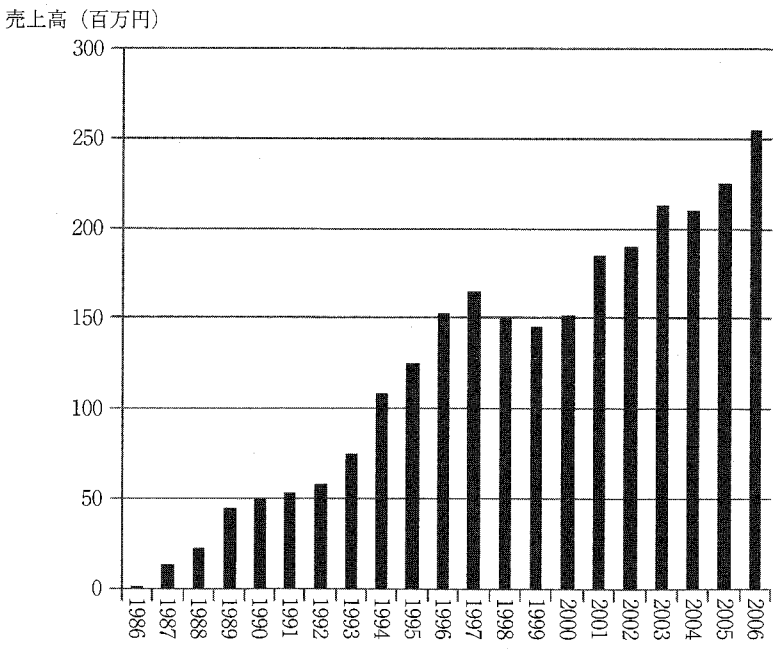


図２　彩商品売上高の推移

それまでは対応できそうな人にその都度個別に電話やFAXで依頼していたが，同報FAXを使うことによって，送付したFAXに対して対応可能な人から電話連絡が入るのを待つだけでよくなった。

防災無線を活用した仕組みは，FAXを使うことで，高齢者にとっても大きな抵抗なく成果を上げることができた。しかし，単純故に出来ることも限られており，情報の加工，ハンドリングという点では限界もあった。そこで，「地域総合情報化システム整備事業」という実証実験事業に応募した。これが認められて，1億6,000万円が事業費用として割り当てられた。そして，1998年度にパソコンを使い「彩」事業で扱う農産物の販売を支援するための情報ネットワークシステムを構築した。このように，産地間競争に打ち勝てるような投資を行った。

このシステムのポイントは，高齢者など，これまでパソコンに縁がなかった人に，どうやって使ってもらえるようにしたか，という点にある。パソコンは使いやすいように改良した。電源ボタンを押せば，自動的に情報ページの画面が立ち上がる。画面の文字は大きく，カーソルを持っていった部分の色が変わることでわかりやすくした。パソコンの導入により，生産者は，出荷量と売れ行き，FAXで市況の動きの両方を見て，明日は何を多めに出すか，自分で調整するようになった。パソコンで毎日数字を見て，商品の売れ行きを予測することが脳のトレーニングになり，おばあちゃんたちが若返ってきたという。

(5) おわりに

上勝町は彩事業を行っていることで高齢者がいきいきとしている町であった。高齢者が彩事業をすることで自信や元気をもって生涯現役でいられることは，高齢者にとってはもちろんだが，年金受給者が納税者になるという点で上勝町にとってもプラスの効果を生みだしていた。これから日本はいっそう高齢化の道をたどっていく。上勝町のように，高齢者もいきいきと働ける場を提案していくことが大切だと思う。上勝町を真似て彩事業を取り入れようとした町もあるが，うまくいった町はまだないと農協で伺った。視察に来た段階で，自分の町でやるには大変そうで無理だとあきらめられる方も多いそうである。そのような話を伺って，何か新しいことを始めるには，横石さんのように熱い思いをもったリーダーの存在が必要だと感じた。

〈参考資料〉

横石知二著『そうだ，葉っぱを売ろう！』ソフトバンククリエイティブ

全国過疎地域自立促進連盟　http://www.kaso-net.or.jp/kaso-it.htm(2010/01/16)

農中総研　http://www.nochuri.co.jp/report(2010/01/16)

株式会社いろどりhttp://www.irodori.co.jp/own/index.asp(2010/01/16)

（北島　芳美）

4　次世代を担う若者定住

(1) はじめに

高度経済成長以降の日本では，産業形態の変化に伴い若者の地方離れが進み，地方での過疎高齢化が進行している。徳島県上勝町もその例外ではなく，人口は1955年の6,265人をピークに毎年減少し，2005年には1,955人と50年間で約70％も減少している。高齢化率も徳島県内最高の49.6％と著しく過疎化と高齢化共に進行している。そんな中で上勝町では，1991年に町の活性化とは「次世代を担う若者定住」と位置づけ，これまで若者定住のための施策を行ってきた。本章では，それらの取り組みがどのような経緯で行われてきたのかを取り上げ，それらの活動の展望について述べていく。

(2) 雇用の創出

1981年の異常寒波により農業が大打撃を受け，これを契機に彩事業や菌床しいたけの栽培が展開された。これに引き続き，上勝町が主体となって5社の第三セクターを次々に設立し，新たな新産

業導入による雇用の創出を図ってきた。これら５社が生み出す雇用は120名にのぼり，若者の定住と町外からのUJIターンの促進に大きく貢献している。

●㈱上勝バイオ【1991年４月12日設立】
【社員】77名（2010.3）臨時・パート含む
キノコ類の菌床生産および販売，農産物の生産加工販売，林産物，畜産物の加工販売，肥料並びに飼料の製造販売を行っている。上勝バイオでは，菌床椎茸栽培のオーナーの募集をしており，半年間の椎茸栽培技術研修を受け，栽培に自信が持てた上で希望すれば椎茸栽培オーナーになれるという制度を実施している。研修ではなく，すぐに栽培オーナーになることも可能である。研修後のメリットとしては，栽培ハウス・住宅情報などを優先的に提供される他，自己経営が可能な椎茸栽培・出荷技術の修得，研修助成金として月額106,700円が給付される等の手厚い支援を受けることが可能である。

●㈱かみかついっきゅう【1991年11月25日設立】
【社員】30名（2010.3）臨時・パート含む
町内の観光拠点として，宿泊・温泉施設の運営管理，特産品の販売等を行う会社である。主には月ヶ谷温泉「月の宿」の運営を行っている。月の宿では，季節の料理や温泉を楽しむだけでなく，料理教室やパソコン教室も実施されており，料理教室では「愉しく食を学ぼう」のスローガンのもと，上勝伝統郷土料理を作り味わうことで伝統文化の伝承等に寄与している。また月の宿の対岸，勝浦川渓流沿いにオートキャンプのできるキャンプ場があり，コテージ，炊事場のあるバーベキューサイト，あまごのつかみ取りができる池があり，キャンプファイヤーもできる。夏には鮎釣りや川遊び，秋には紅葉散策が楽しめ上勝町のグリーンツーリズムの拠点としても機能していると言える。

●㈱ウインズ【1996年４月１日設立】
【社員】12名（2010.3）
国土調査法に基づく国土調査を受託，測量，環境に関する調査，観測，分析等を管理運営する会社である。

●㈱もくさん【1996年７月４日設立】＝地域通貨
【社員】12名（2010.3）臨時・パート含む
町内産の木材を使って加工品の販売，建築設計，建築に関するコンサルタント等を行う会社である。上勝町の豊かな資源を守りつつ，付加価値をつけた商品開発・製造販売を行い，「地球環境の保全」をテーマに，森林の管理・育成から，住宅の設計・施工までを総合的に取り組んでいる。もくさんでは，2006年に木材チップを利用した地域通貨実験を行うなど積極的に地域の森林保全活動に貢献している。

●㈱いろどり【1999年４月２日設立】
【社員】７名（2010.3）臨時含む
彩産業を柱にその他の農産物の販売支援，イベント企画運営，上勝町の対外的な情報発信を行っている。いろどりでは「地域密着型インターンシップ研修」を行っている。上勝町に１ヶ月間じっくり腰をおろし，上勝町の「人」「自然」「生活」「文化」に触れながら，「上勝町コミュニティビジネス」の現場を体験するとともに，上勝町での就業・企業・定住のきっかけをつくることを目的としている。また，葉っぱビジネスなどを学ぶ「職業訓練講座」なども行っておりIUJターンの促進に大きく貢献している。

(3) 住環境の整備

前節で述べたように，上勝町では新産業導入により120名の雇用の創出に成功し，雇用が生まれ

たことで，上勝町への定住の需要が少しずつ増加傾向にあった。しかし，上勝町には，貸してもらえる空き家がほとんどなく，町営・公営住宅も入居済みで定住してもらうための基本条件の一つである住宅の確保が困難な状況にあった。一方で，次世代を担う児童については，1969年には町内全校で539人いた児童が1999年には88人にまで減少し，それに伴い小学校も統廃合を繰り返し，1969年まで５校あった小学校は2001年には１校に統合された。廃校になった小学校の１つの旧福原小学校校舎の有効活用について，行政と地域住民の協議の結果，町の重要課題である若者定住を進めるために，複合住宅として改修し活用することが決まった。2001年１月より入居者を募ったが，入居公募者が殺到しすぐに満室になったそうだ。のちに，旧福原小学校校舎は文部科学省の「廃校リニューアル50選」に選ばれ，注目を浴びている。2003年にも新たに廃校を利用した複合住宅の建設が行われるなど，既存の建物を有効活用した定住促進がすすめられている。また，2006年から小中学校合わせて５年以上就学することを条件に，小学校４年生以下の児童を伴って転入される世帯に30万円の引っ越し支度金の支給が行われる上勝町児童転入支度金事業や出産祝金，乳幼児医療費助成，奨学金などの支援がはじまり，上勝町は子育てがしやすい町へと変わりつつある。

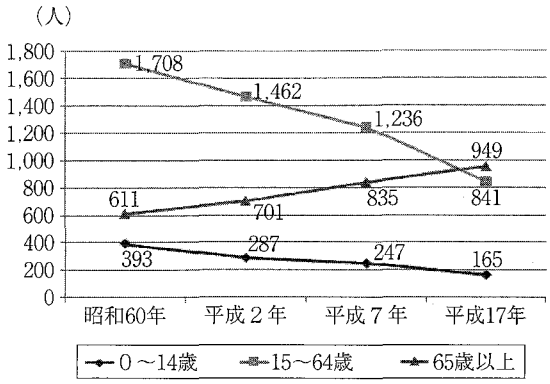
(4) 生活体験への取り組み

上勝町では，交流から定住への取り組みのひとつとして「ワーキングホリデイ」が行われている。ワーキングホリデイとは，全国から集まった参加者が農家に宿泊し，寝食を共にしながら農作業を手伝い交流を深めるというものである。2002年～09年までに192名の参加があった。間伐材の出荷作業，枝うち，柑橘栽培，いろどり出荷作業，稲刈り，畑作業，道づくりなど様々な体験ができ，好評である。

また2010年にはNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミーが運営する，泊まって上勝暮らしを体験することができる「上勝町生活体験施設　くるくるハウス」ができた。上勝暮らしをまるごと体験してもらうために，くるくるハウスでは「ごみはゴミステーションに」「食事のお買い物は上勝町内で」という２つのきまりを設けている。日本で初めて「ゼロ・ウェイスト宣言」をした町，上勝町の34種類の分別を体験してもらうことで，町が進めるごみ政策を頭でなく身体で感じてもらい，また猟師さんの捕ってきた新鮮な鹿肉や上勝のお母さんの手づくりこんにゃくや豆腐，お漬物などが手に入る産直市で買い物してもらい地域の方々との交流を図ることで，肌で感じることができる仕組みになっている。一年間で約3,600人の利用があり，そのうちの約半数が町民の利用で，くるくるハウスでケーキやパンの販売イベントや月１回のライブイベントを行うなど，新しい地域のコミュニティの場となっている。利用者からは，施設の質と比較すると宿泊費が安くとても利用しやすいという感想をもらっており，県外から１ヶ月以上の長期滞在の利用もされている。取り組みの成果として広島県から１名のＩターン者を獲得することができた。今後の目標としては，より多くの方に利用していただき移住をしてもらうということである。

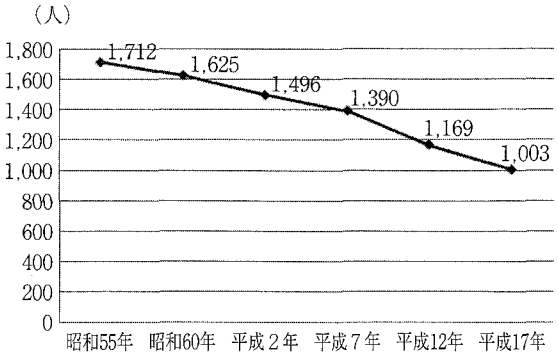
(5) 今後の課題

これまで述べてきたように，上勝町では若者の定住促進のための様々な施策が行われている。しかし，数値で見てみると15歳以上就業者数・人口の減少に歯止めがかからず，若者の人口が減少する一方で高齢者の人口は年々増加していることがわかる。これまで行ってきたセクターによる雇用の創出や廃校利用による住環境の整備，生活体験の場の提供などは，数値としては分かりにくいが若者の定住促進に大きく寄与する取り組みになったのではないかと思う。特に５つの第三セクターによる産業の革新は大きく上勝の発展に貢献した。若者の定住を促すためには最低限生活に必要な資金を稼ぐための仕事と，生活の拠点である住居の確保が必須条件になる。だが，小さな町で創出できる雇用の数には限界があり，それに加え３



参考：国勢調査

図３　上勝町の人口の推移



参考：国勢調査

図４　上勝町の15歳以上就業者数

節で述べたように上勝町には貸してもらえる空き家がほとんどなく住環境の確保も難しい課題となる。これからの上勝町の課題は，「若者定住の促進」から新たな戦略へと展開していくことではないだろうか。1991年度計画書策定後から町の活性化とは「次世代を担う若者定住」と位置づけてきたが，それから約20年たったいま，新たな変化が求められるのではないか。

(6)　まとめ

上勝町は，これまで「次世代を担う若者の定住」を町の活性化策として施策に取り組んできた。その中で，第三セクターによる雇用の促進や行政による廃校を利用した住環境の整備，NPO法人による生活体験の場の創出やこの章では取り上げなかったが住民による若い世代の定住を一つの目的とした１Q運動会など様々なモノが地域の中で生まれてきた。産・官・民が一体となり相互に作用しながら取り組みが発展していった姿から町全体の地域に対する愛情や誇りを感じられる。前節でも述べたように雇用の創出の限界や住環境など困難な課題が町にはあり，また全国の過疎地では上勝町と同様に若者の定住促進に関する取り組みは活発化しており，多くの自治体間で人材の取り合いが行われているようにも見える。

しかし，多くの場合はどの自治体でも共通して「仕事」や「住居」の課題を抱えており，前節でも述べているように上勝町もその例外ではない。過疎，高齢化，少子化で，人は少なくお店も少ない。決して住むのに便利なところではないが，豊かな山の幸に囲まれ，元気なおばあちゃんたちの笑顔がいっぱいの上勝町は人を惹きつける魅力に溢れている。住んでもらうことは難しいかもしれないが，深いつながりを築きイベントや長期休暇に帰って来られるような，第二のふるさととして町に親しんでもらうのはきっと可能である。2007年に行われた「上勝アートプロジェクト～里山の彩生」で国内外で活躍するアーティストと交流を深めるなど，交流の基盤はできつつあるのではないだろうか。若者定住の促進の取り組みから，新たに「交流」という切り口で新たな施策が展開され，町にたくさんの人が入ってくる仕組みができ，多くの人にとって上勝町が第二の故郷として親しまれるような地域になれば，必然的にもっと多くの若者の定住促進にもつながっていくだろう。これからの上勝町のさらなる飛躍に期待したい。

〈参考資料〉

「地域づくり通巻239号」地域活性化センター
『平成20年度地域活性化ガイドブック　地域コミュニティの再生』地域活性化センター
関満博・遠山浩編『「食」の地域ブランド戦略』新評論

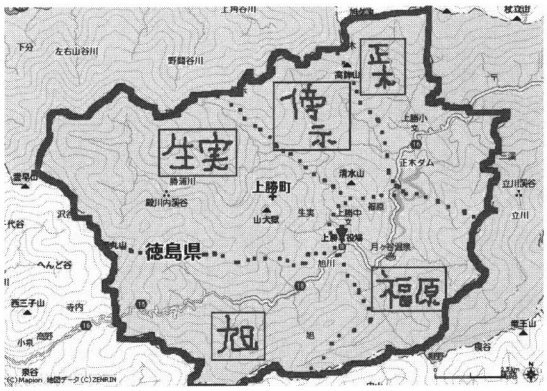
上勝町役場HP　http://www.kamikatsu.jp/
株式会社もくさんHP　http://www.nmt.ne.jp/~mokusan/
株式会社いろどりHP　http://www.irodori.co.jp/
株式会社上勝バイオHP　http://www.kamikatsu-bio.co.jp/kankyou/kankyou.html
上勝町WINS HP　http://www.mandala.ne.jp/kamikatsu/kamikatsu.html
徳島月ヶ谷温泉「月の宿」HP　http://www.e-kamikatsu.jp/
くるくるハウスHP　http://tokushima-taiken.net/category/0244355.html
徳島新聞社　http://www.topics.or.jp/localNews/news/2010/12/2010_129159755834.html

（宮崎　将史）

5　上勝町の人づくり活動

(1)　はじめに

上勝町では，いろどり事業をはじめまちづくりにおいてさまざまな活動が行われている。その中でも注目される活動の一つに「１Q（いっきゅう）運動会」や「１Q塾」等の“人づくり”活動がある。いま現在，日本全国の地方において過疎化や高齢化といった地域の問題が深刻化しており，上勝町も例外ではなく，それらの地域問題を抱えている。そこで上勝町では，過疎化や高齢化の進行に起因する地域の課題を解決するには，行政任せではなく住民一人ひとりが問題意識を持ち，全員でまちづくりに取り組むことが重要であるとしてこの活動を展開している。そこで“人づくり”は1991年度計画書策定後の重要施策の一つにも掲げられ，「強靭な問題解決能力を中心とした人間形成」を目標に「１Q運動会」等を通して，研修・実践活動を行っている。

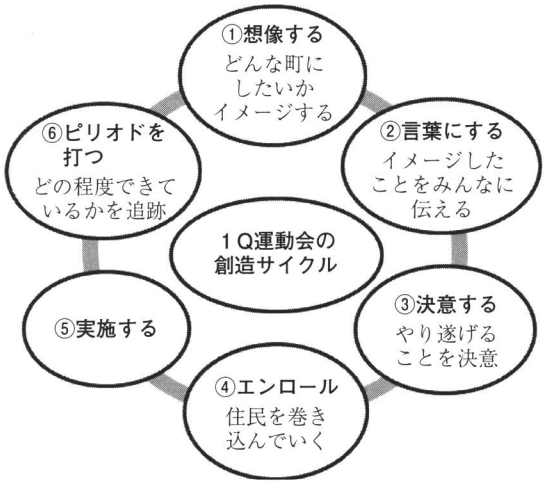


上勝町区分図
＊http://www.mapion.co.jp/m/を参考に作成

ここでは，上勝町の“人づくり”活動がどのようなコンセプトの下で展開され，どのような活動が行われてきたのかを取り上げるとともに，活動が行われ始めてから数十年が経った現在，これまでの成果や課題をもとに今後，より活動を発展させるためにはどのような取り組みが必要なのか。さまざまな視点から考え，述べていきたいと思う。

(2)　人づくり活動の概要

上勝町の“人づくり”活動の中心には「１Q運動会」や「１Q塾」がある。１Qとは，『住民が一休さんのように，問題（Question）を考え知恵を使ったまちづくりを進めること』を目指してつけられたフレーズである。さらに同町では，地域の諸問題の解決の一つとして住民自身が問題意識を持ち，振興のための課題を明らかにし，解決法を見出しながら，まちづくりを進める「いっきゅうと彩の里」づくりが構想化されるとともに，１Q運動会や１Q塾などによる人材育成・実践活動を展開している。「１Q運動会」は，趣旨としては，『上勝町の目標達成のため地域ぐるみでまちづくりを推進し，協力して成果を上げれば，まちづくりの喜びを分かち合うことができ，素晴らしいまちづくりができる』ことにあり，『自ら考え自ら行う地域づくり』をコンセプトに1993年12月に町内を正木・福原・旭・生実・傍示の五つの地区に分け，各地区６名の委員を中心に組織され，２年の任期の中で，会議や研修を通して「いかに地区を良くするか」を考え，疑問・課題を出し合い解決に向けて目標を立て，委員が企画したまちづくりに住民全体で取り組んでいる。その取り組みは，２年に一度，成果発表会の場で活動の報告を



１Q運動会の概念図

＊上勝町資料より引用

行い，県庁や大学関係者など町外の人によって，評価が行われる。各地区は，その成果を競い合う仕組みで地区ごとに独自の工夫が凝らされている。また各地区には，役場から地区ごとの町づくりのコンセプトに合わせて自由に使うことが出来る活動補助金として年に８万円が支給され，委員には謝礼金という形で報酬が支払われるなどのサポートも行われている。このように１Q運動会では，町の活性化を図るために，大勢の住民が中心となって知識と知恵を使って若い世代が好んで定住できる地域社会を，運動競技のように地域間競技で面白く，かつ楽しく展開していく「頭脳と体力によるまちづくり運動」により，まちづくり・人づくり（意識改革）を進めている。

また，１Q運動会と共に行われてきたのが「１Q塾」である。過疎化が深刻な問題である上勝町で一番恐ろしいのは，人口の減少で人材が不足してしまうことである。その解決のためにも，自分の住んでいるところが好きで，定住意欲の強い，質の高い住民づくりとして，現状の把握・課題・問題点の整理，取り組みの進め方をはじめ，さまざまな研修会を行っている。「１Q塾」はグループで疑問・課題を出し合い解決に向けて活動する１Q運動会に対し，個人に対して研修や意識改革を行っている。

(3)　各地区の特徴と活動

上勝町では，17年前から５つに分けられた各地区の１Q運動会がそれぞれ独自の活動を行っている。近年では１Q運動会の活動テーマが『若い世代が好んで定住できる地域づくり』であることから，１Q運動会を通して移住してきた人々との交流が促進され，新たな担い手として関わりを深めている。そこで，各地区が日頃どのような活動を行っているのか，また2007年に徳島県で開催された「第22回国民文化祭とくしま2007」において町全体で『上勝アートプロジェクト～里山の彩里～』と題し，木材などの地域資源を材料として世界的に有名な作家と地域住民による野外アートの制作が行われた時の各地区の取り組みも含めて紹介したいと思う。

正木地区

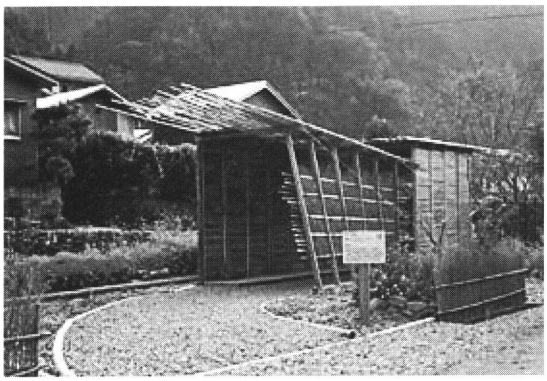
正木地区は，日頃の活動として環境美化や夏祭りの参加，観光案内壁画の塗り替え，高齢者教室・芸術文化祭への参加，イルミネーションの設置，先進地の視察などを行っている。国民文化祭では，筑波大学准教授で造形作家の國安孝昌氏と共に，作品の制作に取り組んだ。地域の誇りである雄淵・雌淵の力強い水の流れをテーマに景観に霊力を感じる正木の場と分かちがたく一つになった作品を制作した。

（作品：淵神の塔）

福原地区

福原地区は，日頃環境美化（花壇整備・看板修復）やイルミネーションの設置，先進地への視察などを行っている。国民文化祭では，建築家でア

ーティストのエコ・プラウォト氏と共に，人と出会い，住民を取り巻く環境の問題や，その中にある希望～自然や暮らしを愛する心の継承，廃棄物の芸術のかけらへの変容～を共有し，時を越えて若い世代へと伝えていく思いを作品にした。



（作品：タイム・ブリッジ）

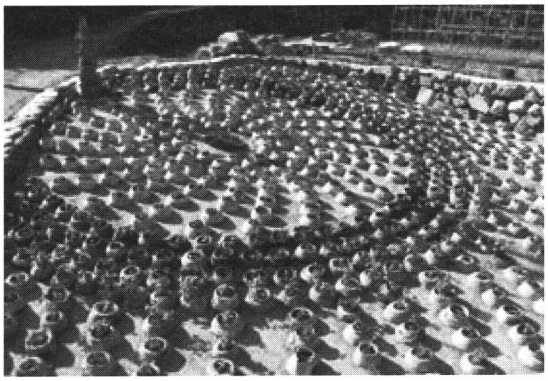
旭地区

旭地区は，日頃の活動として地区内の秋祭りの開催やお盆の集い，棚田の音楽祭の開催，門松の設置，先進地への視察・研修などを行っている。国民文化祭では，神奈川大学教授で建築家の曽我部昌史氏と共に，大量の木を使うことが無駄ではなく，森のためになるということを考えて作品を作成した。

（作品：もくもくもく）

生実地区

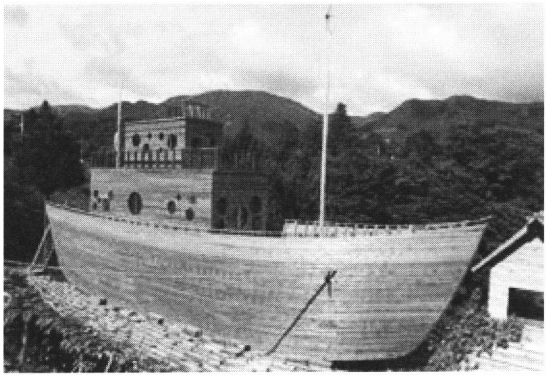
生実地区は，日頃，環境美化や先進地への視察などを行っている。国民文化祭では，東京芸術大学教授で造形作家のたほりつこ氏と共に山との新たな共生をめざす叡智や感性と元気に出会う想像上の発掘現場，伝統の石垣から「生実はじまり」の木を中心に，作品を作成した。



（作品：トポス彩2007）

傍示地区

傍示地区は，日頃，環境美化や特産品の開発，お盆の集い，秋祭りの開催，講演会の開催，先進地への視察などを行っている。国民文化祭では，東京芸術大学教授でアーティストの日比野克彦氏と共に，山の中の造船所をテーマに，作品を制作した。



（作品：射手座造船所）

このように，近年の活動は多岐にわたって行われている。実際に，現在１Q運動会の委員として活動されている方の一人は，「自分の感覚では，これらの活動は上勝の一部でもあり，原点でもある。“まちづくりは人づくり”ということに尽きる。一人ひとりが自分の居場所を確保し，自分のやるべきことを見つけておくこと。それ以上でも以下でもない。今も，多くの若者が全国から上勝を目指して集まってきている。だから一気に進む

と思われた過疎化も高齢化も緩やかになっている。でも，一番すごいのは，上勝に集まった若者の誰もが，自分の役割を見つけていること」とおっしゃっていた。上勝町の１Q運動会の取り組みは，地域住民のみならず，全国のまちづくりに興味のある若者にも大きな影響を与える活動となっていると言えるのではないだろうか。

（＊各地区の写真はhttp://www.kamikatsu.jp/satoyama/kamikatsu/artnews.pdfより引用）

(4) 今後の取り組みと課題

１Q運動会などの“人づくり”活動が始まって17年が経った現在，一定の成果は出てきたものの，新たな問題点も多く出てきている。活動のスタート当初は，地区ごとに目標を立て活発に活動が行われていた。しかし，17年が経ち活動のマンネリ化や目標の拡散化・抽象化になり，消極的なものになりつつある。さらに，１Q運動会において特に問題点として挙げられるのは，若者の参加が極端に少ないことと人材不足である。現状では，活動に対する住民の参加率は，活動内容によっても異なるものの数十人ほどで，参加者の年齢層も若者に比べると，高齢者の方が圧倒的に多い。そこで，今後の取り組みとして「若者の参加促進」「人材の育成」に重点を置いている。そこで上勝町では，株式会社いろどりが主体となって，内閣府地域社会雇用創造事業の一つとして行われている“地域密着型インターン研修”を実施している。地域で活躍できる人材の育成のために，地域の一人一人が「出番」や「居場所」を持ち生きいきと活躍することで，コミュニティビジネスを形づくってきた上勝町で，この町に１ヶ月間じっくりと腰をおろし，上勝町の「人」「自然」「生活」「文化」に触れながら，「上勝型コミュニティビジネス」の現場を体験するとともに，上勝町での就業・起業・定住のきっかけをつくる目的で行われている。また若者の定住を目的とした“上勝町ワーキングホリデイ”を2005年から行っており，現在までで約200人の若者が参加している。このように，活動内容の充実だけでなく実際に活動する人材の育成に，より力を入れていくことが，１Q運動会の発展に繋がっていく。

(5) 最後に

上勝町の人づくり活動は，スタートしてからおよそ17年が経ち，その活動は町に大きな成果をもたらした。人づくり活動の中心である１Q運動会での各地区の活動は，環境美化やイベントの開催，先進地域への視察など，一つ一つを見ると活動規模はさほど大きいモノではなく，決して大きな影響を与える活動ではない。しかし，それぞれの活動を一つとして見たとき，その活動は，町にとって，そしてそこに住む住民のモチベーションに大きな影響を与えるものになっているのではないだろうか。それは，行政任せではなく住民が主体となって活動を行い，全員でまちづくりに取り組むことで，楽しく・面白くまちづくりが行える環境が上勝町にはあるからである。その上勝町の魅力に惹かれ，現在は全国から多くの若者がワーキングホリデイやインターンシップを活用して，上勝町に集まっており，それをきっかけに移住してきた若者もいる。このように，上勝町には未来の上勝町を担っていく若者が今も集まってきている。しかし，まだまだ活動への参加者の年齢層を比較してみると，高齢者の割合が多く，人材不足問題の解決にまでは至っていない。だが，上勝町に魅力を感じ，上勝の地でまちづくりをしたいと思ってやってくる若者がいるのは，町にとって非常に大きな存在であり，希望でもあると言えるのではないだろうか。これからも，より一層上勝町の人づくり活動が発展していくためにも，今後，上勝を担っていく若者と，今まで上勝を引っ張ってきた高齢者の方たちが一緒になり，知恵や知識を出し合ってより充実した活動になっていくことを期待したい。

〈参考資料〉

http://www.mapion.co.jp/m/
http://www.kaso-net.or.jp/it/kamikatu.htm
http://www.perf.tokushima.jp/docs/2010092700373

http://www.kamikatsu.jp/satoyama/kamikatsu/artnews.pdf
http://www.kamikatsu.jp/
「いっきゅうと彩の里・かみかつ」徳島県上勝町，平成21年３月発行
笠松和市・中嶋信著『山村の未来に挑む　上勝町が考える地域の活かし方』自治体研究社

（森貞　　彩）